第994回サントリー定期シリーズ
1月23日(火) 19:00開演　サントリーホール

第159回東京オペラシティ定期シリーズ
1月25日(木) 19:00開演　東京オペラシティ コンサートホール

第995回オーチャード定期演奏会
1月28日(日) 15:00開演　Bunkamura オーチャードホール

指揮：ミハイル・プレトニョフ

ピアノ：マルティン・ガルシア・ガルシア*

コンサートマスター：依田真宣

シベリウス：組曲『カレリア』Op. 11（約15分）

I.　間奏曲
II.　バラード
III.　行進曲風に

グリーグ：ピアノ協奏曲 イ短調 Op. 16*（約30分）

I.　アレグロ・モルト・モデラート
II.　アダージョ
III.　アレグロ・モデラート・モルト・エ・マルカート

― 休 憩（約15分）―

シベリウス：交響曲第2番 ニ長調 Op. 43（約45分）

I.　アレグレット
II.　アンダンテ、マ・ルバート
III.　ヴィヴァーチッシモ
IV.　フィナーレ：アレグロ・モデラート

主催: 公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団
助成: 文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
　　独立行政法人日本芸術文化振興会（1/23）
協力: Bunkamura（1/28）

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。
♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。
♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。
♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。
♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

出演者プロフィール

©上野隆文

指揮

ミハイル・プレトニョフ

Mikhail Pletnev, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団 特別客演指揮者

一言では説明できない多才な芸術家。ピアニスト、指揮者、作曲家として魔法のような才能で、世界中の聴衆を魅了している。1957年ロシアのアルハンゲリスク生まれ。1978年、21歳でチャイコフスキー国際コンクールのゴールド・メダルおよび第1位を受賞し、国際的な脚光を浴びる。驚くべき技巧、深い知性に裏づけられた演奏、完璧にコントロールされた美しい音色で、カリスマ的人気を誇る現代最高のピアニストの一人として活躍。

ドレスデン国立歌劇場管弦楽団、ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団ほか数々のオーケストラを指揮。ボリショイ・オペラでの『スペードの女王』指揮で大成功を収めているほか、コンサート形式のオペラ指揮も行っている。

1990年ロシア内外の個人、団体より資金を得、ロシア史上初めて国家から独立したオーケストラとしてロシア・ナショナル管弦楽団（RNO）を設立。指揮者として東京フィルハーモニー交響楽団には2003年7月に初めて客演、以来定期的に招かれ、2015年4月より特別客演指揮者に就任。2022年には新たなオーケストラ、ラフマニノフ国際管弦楽団（RIO）を創設。

©Darek Golik (NIFC)

ピアノ

マルティン・ガルシア・ガルシア

Martín García García, piano

マルティン・ガルシア・ガルシア（1996年ヒホン生まれ）は、27歳にして、国際的に最も活躍するピアニストの一人とされている。2023年は世界各地（アメリカ、アジア、ヨーロッパ）で約80回のコンサートを行い、韓国、メキシコ、ブラジルでデビューを果たした。日本、アメリカ、カナダ、ポーランド、イタリア、スペイン、ポルトガル、ベルギー、リトアニア、ルクセンブルクにて素晴らしいリサイタルを開催、またNHK交響楽団、ソウル・フィルハーモニー管弦楽団、ハンブルク交響楽団、ワルシャワ・フィルハーモニー、リトアニア国立交響楽団、ブラジリア管弦楽団などの名だたるオーケストラと共演している。

2022年にはアメリカ、アジア、ヨーロッパで70回以上の公演を行い、ニューヨークのカーネギーホールでのデビューや、日本でのツアーは14公演で25,000人を動員するなど、大成功を果たした。

ガルシア・ガルシアは、2021年クリーブランド国際ピアノコンクール第1位、2021年ショパン国際ピアノコンクール第3位など、世界的に高い評価を得ている。2022年にはデビューアルバム「ショパンとヒズ・マスター」をリリース。

彼はレイナ・ソフィア音楽学校を卒業、同校ではガリーナ・エギザロヴァ教授に10年間師事、ソフィア王妃から「最優秀学生賞」を受ける。また、ニューヨークのマネス音楽院にて著名なピアニスト、ジェローム・ローズに3年間師事、修士号を取得している。

楽曲紹介

解説＝神部 智

今回の定期演奏会は、ポピュラーなグリーグのピアノ協奏曲とシベリウスの交響曲第2番がメインで、それに組曲『カレリア』が花を添えるという、いわば真正面勝負のプログラムだ。スカンジナヴィアの作曲家に対して、時に「北欧のリリシズム」などと評されることもあるが、グリーグとシベリウスの音楽はそれだけにとどまらない。北国特有の荒々しさ、強靭さも内奥に秘めているのである。

それら名曲中の名曲を、ロシアの名匠で東京フィル特別客演指揮者のミハイル・プレトニョフがどのように挑むのか。ノルウェー、フィンランド、ロシアはそれぞれ文化や歴史が異なるが、各国に共通するのは北国の厳しさ、そして自然の厳しさ故に灯る人々の温かさだろう。本日はプレトニョフの指揮を通して、グリーグとシベリウスのエッセンスをじっくり味わいたい。

シベリウス
組曲『カレリア』Op. 11

フィンランドの作曲家ジャン・シベリウス（1865-1957）は1893年、ヘルシンキ大学のヴィープリ学生協会の依頼により、舞台劇『カレリア』の付随音楽を作曲する。

フィンランド南東部に位置するカレリア地方の中心都市ヴィープリは、同国の民族叙事詩『カレワラ』発祥地の一部だが、隣国ロシアとの政争に巻き込まれた悲劇の町である。日々厳しさを増していくロシアの政治的弾圧（フィンランドは当時、ロシア帝国に支配されていた）を背景に、若者たちはカレリア地方との精神的つながりを深める目的で愛国的な舞台劇を企画。13世紀から19世紀までのカレリア地方で起こったさまざまな歴史的出来事を活人画で表現するという舞台劇の趣旨に賛同したシベリウスは、序曲と8つの情景の付随音楽を提供した。

その付随音楽から第3、第4、第5の情景をコンサート用に改編して出版したのが、組曲『カレリア』作品11である。**第1曲「間奏曲」**は1330年頃の情景で、さざ波のような弦楽の伴奏を背景に、金管がリズミカルな主題を奏でる。少しずつ力が増幅していき、やがて大きな頂点を迎えると、今度は余韻を残しなが

らデクレッシェンドしていく。**第2曲「バラード」**は1440年頃の情景。ヴィープリ城の中で吟遊詩人が哀愁を帯びた旋律を歌う場面である。弦楽がメランコリックな旋律をしみじみと奏するが、最後はイングリッシュ・ホルンによる印象的なフレーズで締めくくられる。**第3曲「行進曲風に」**は1580年頃の情景。弦楽による付点リズムの主題、金管のファンファーレを伴う主題の2つが交互に登場しながら、最後までエネルギッシュに「行進」していく。

[作曲年代] 1893年
[初演] 1894年4月24日、ヘルシンキ、ロベルト・カヤヌスの指揮による
[楽器編成] ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、打楽器（タンブリン、大太鼓、トライアングル、シンバル）弦楽5部

グリーグ
ピアノ協奏曲 イ短調 Op. 16

ベルゲン生まれのエドヴァルド・グリーグ（1843-1907）は、ノルウェーを代表するロマン派の作曲家である。ライプツィヒ音楽院に留学し、ドイツの作曲技法を習得したグリーグは、とりわけロベルト・シューマンの音楽に深く傾倒したという。

清澄なロマンティシズムに溢れるグリーグ唯一のピアノ協奏曲は、作風的な面でシューマンの協奏曲としばしば比較される。それは単なる偶然ではないだろう。事実、グリーグはライプツィヒ音楽院に留学時、シューマンの妻クララが演奏する彼のピアノ協奏曲を聴いて、「忘れられない印象」と述懐している。

初演時より大好評を博したグリーグのピアノ協奏曲は、出版に際して何度も修正の手が加えられた。これまで計5種類の楽譜が出版されているが、今日広く用いられているのは1917年に出版された改訂第4版である。それはグリーグが亡くなる1907年、作曲者自身が生前最後の改訂を施した版と考えられている。

この協奏曲には、ピアノの名手でもあったグリーグ独自の書法が随所に見出される。ソナタ形式の**第1楽章**は、まるでフィヨルドを激しく流れ落ちる滝のように、一気に下降するピアノ・ソロで幕を開ける。続いて登場する舞曲風の主要主題と、リリシズムに満ちた副次主題の2つを軸にしながら展開していく。コー

ダの直前に配されたカデンツァでは、グリーグの巧みなピアノ書法を垣間見ることができる。緩やかな**第2楽章**は、抒情的な表現世界の極みといえる音楽。弦楽の美しくも静穏な旋律で始まり、やがてピアノが加わると徐々に高揚していく。そして遂にはピアノが冒頭の旋律を高らかと歌い上げる。**第3楽章**は第1楽章と同様、ノルウェーの民族舞曲を思わせる主要主題と歌心に満ちた副次主題が交互に登場。最後は副次主題の強奏で巨大なクライマックスを迎え、ドラマティックに終結する。

[作曲年代] 1868年
[初演] 1869年4月3日、コペンハーゲンにて、ホルガー・シモン・パウリの指揮、エドムン・ネウペットの独奏による
[楽器編成] フルート2（2番はピッコロ持ち替え）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部、独奏ピアノ

シベリウス
交響曲第2番 ニ長調 Op. 43

シベリウスが交響曲第2番の創作に集中したのは、1901年夏から翌02年初頭にかけてであった。作曲に着手する直前、シベリウスは創作の刺激を求めて家族とイタリアに旅行しており、そのため南欧の明るく牧歌的な雰囲気がその曲調に反映しているといわれる。だがこの交響曲は、決して穏やかで温かい気分（例えば、第1楽章の冒頭）に終始するわけではない。激しい苦悩と葛藤（第2楽章）、嵐のようなうねりと静穏（第3楽章）、そして魂の高揚や英雄的なファンファーレ（第4楽章）など、作曲者の優れた筆致によって、あらゆる表現の限りが尽くされるのである。

とりわけ注目されるのは、「明」と「暗」の世界の相克を通して輝かしい勝利へと導かれる交響曲の終結部であろう。この作品を初めて耳にした当時のフィンランドの聴衆は、「暗」の要素をロシアの政治的弾圧に喩え、「明」が「暗」を乗り越えて力強く終結するフィナーレの内に、自分たちの「未来への希望」を重ね合わせようとした。交響曲において抽象的な表現を目指していたシベリウスがそのように見え透いた標題的解釈を喜ぶことはなかったが、交響曲第2番の表現世界は「作曲者の意図」など遥かに超え、今なお聴き手の心に訴えてやまな

いさまざまなメッセージを秘めている。それが、この交響曲の真に傑作たる所以であろう。

第1楽章は展開部後半に巨大なピークを配したソナタ形式。曲冒頭の伴奏形に現れる3度上行（嬰ヘ-ト-イ）の動きは、交響曲全体を統一する重要な要素として働く。**第2楽章**は激しい起伏を伴うドラマティックな緩徐楽章。**第3楽章**は、抜群の推進力を持つ弦楽器の旋律と、オーボエ・ソロによる穏やかな旋律が交互に現れるスケルツォ。最後は一気に高潮し、アタッカで勇壮なフィナーレへと流れ込む。**第4楽章**は「明」と「暗」を象徴する2つの主題の性格的対比が顕著なソナタ形式。曲の終盤では、執拗に繰り返される短調の副次主題が大きなうねりを形成していくが、その頂点で主調のニ長調に転ずると、「希望の賛歌」を思わせる壮大で輝かしいクライマックスを迎える。

[作曲年代] 1901～1902年
[初演] 1902年3月8日、ヘルシンキにて作曲者自身の指揮による
[楽器編成] フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、弦楽5部

かんべ·さとる／ヘルシンキ大学大学院にて博士号取得。博士（音楽学）。国立音楽大学教授·副学長。大学の公開講座や市民講座の講師、NHK番組の出演·監修など多方面で活躍している。北欧音楽やシベリウスに関する論文、エッセイ、プログラム·ノート、ミニチュア·スコアの解説を多数執筆。著書に『シベリウスの交響詩とその時代』、『作曲家·人と作品　シベリウス』（以上、音楽之友社）など。第30回ミュージック·ペンクラブ音楽賞受賞。